

4.26~28在保一週戦争と明大斗争の展望
 現任何な起り、何な起ころうとしているのみ。

全明の学友諸君、現任の世界情勢の特徴は何と物語っているのだろうか。朝鮮半島に於ける危機は、全世界帝国主義列強の危機を象徴しているのではない。「オニのズエラ口事件」と言われる米軍機撃墜事件は「北朝鮮のなままでの武力統一」という路線との対立関係の中心。米帝国主義の侵略反革命と安保条約に基づき、日帝の朝鮮市場の確保のための反革命的対応、「積極的研攻」可能な自衛隊の共同捜索を通じての実体的共同軍事こそ、日米安保条約の主体として、自衛隊の海外派兵、戦線の前進基地化の本質を見抜かねばならないのである。安保放棄という内容が、いまやかしであるな情勢をなましているのではない。我々みな行けばならないのはこうした反革命侵略基地化という安保条約の主体なのであり、60年安保と70年安保の質的差異がここにある。半導体戦争もたつて来る視察から北朝鮮の行方、共産党の「北朝鮮全面返還」「安保条約破棄」の怒鳴り声は故に感じるのである。驚くべきことに、石炭、民族主義者である日学同の提議と同じ主張であることも加えておく。半導体戦争はたつて来る視察をいませるのなら、基地撤去、米軍機撃墜、侵略前進基地化阻止でなければならぬ。(毎このことは半導体人民の斗争の発展過程で見れば明らかであり、2.4セネマト以降の発展過程とヨリの内容な基地撤去であることを明らかであろう。「農民の希望を具言会談」の組織表現こそその象徴である。) こうした情勢の中にあつて4.28在保一週戦争を迎えているのであるが、帝国主義佐ト政府はその斗争を圧殺せんとして戒厳体制という名の治安弾圧を及ぼすとしている。ヴェトナムを中心とする先進国近代朝鮮の半島危機へと発展していく中であつて、先進帝国主義は日帝の朝鮮に政治危機を及ぼせざるをえない脅に連綿的反抗斗争→安保条約戦争を圧殺せんとしている。

4.28在保一週戦争から1月間大斗争の展望、そして朝鮮半島の全日的斗争に対する学友の帝国主義的再編=中教管管申の攻撃をまさしく権利のファシズム的再編の一環として展開されているのである。

代々不共産党の諸君は、こうした帝国主義者の野望を見抜くことなできず、トロツキストな挑発するから権利を介入するといつたまやかしの欺理を用いているのである。では黙って、おとなしく歌でも唱ってしまえば権利はなにもさす僕達に向かしてくるのだろうか。国家の本質を一切認識していないのな民権諸君なのである。まず国家の支配を批判することに先づき、それから僕らを批判するのなら筋も分かる。ただ帝国主義ブルジョアジーの批判は何もせず(したとしても固定化された古くさい情勢しか語ることなできない)トロツキスト攻撃にやっきとなっているのである。結局は帝国主義を美化していることに気がつけないのな、日共=民権の諸君なのである。

我々のヨリが10.8以降、竹竹者階級内部に流動をもたらし、反政府青年委員会の実体的強化の中にあつて、社民指し部はその下部からのつき口により、強固な社会党総評内閣はその弁解を重ねている。我々はたつてる状況の中にあつて、竹竹組合の形骸化を、まさしく進路民主主義に立脚した評議会運動を展開する中で、単年の竹竹者階級を分析しなければならぬ。

明大の学友諸君はこうした情勢の中において、起ころうとしてをこらしたのである。すなわち、権利の攻撃が我々の市民生活にまでおひやかしているのであつて、権利の再編なせまで進行していることである。学友の情勢は、こうした敵権利の暴行の前に、いさにその矛盾を露呈し、大衆党の権利介入に対する無能力と無方針、そして、学生的事先権に敵対的學生運動を圧殺せんとしているという警報が事実明らかになった。

学友諸君は、この過程において弁解を開始し、院生、脚手の斗争も開始これんとしている。教壇を目前に治しては、代々不共産党の圧制的ヘゲモニーのたつた一方に於て「学生参加=全学評議会方式」をとり、たせ、一方に於て「一部権利学生の追及」という全学政策ブルジョアジーの思考と統理と后じ打たせんとしている(中教管管申の内容と向て依っていることな) また、学生内部の日共=民権と教壇会との結合によ

